

「愛」の形

奨励	内山 宏〔うちやま・ひろし〕
奨励者紹介	日本キリスト教団扇町教会牧師

これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

（コロサイの信徒への手紙 3章14節）

気づき

今日は、久しぶりに母校に戻って共に礼拝を守り、このような形で出会いの場が与えられたことに感謝しています。しかしながら、あの東日本大震災や福島第一原発での事故のことなどを思い出すと、状況は現在進行形で、そのなかで何を語ることができるだろうかという思いももたながら、この場に立っています。

一つ思い出すことがあります。それはもう30年以上前のことですが、当時私は、出身教会、母教会である鳳教会で牧師をしていました。同志社大学神学研究科を出てすぐに鳳教会に主任伝道師として就任しました。大阪市の南、堺市にある教会で、休みの日などに梅田へ行くこともありました。今はその近くの扇町教会で牧師をしています。当時は梅田の、阪急三番街という地下街によく行きました。ある日、いつものように三番街の地下2階に行った時のことです。そこには人工の川が流れ、確か当時はスピーカーから鳥のさえずる声が聞こえていたように思います。私は元々、電気関係のエンジニアになろうとしていた人間ですので、この人工の川がどんな仕組みになっているのか、照明や音響設備がどのようになっているのかはある程度分かります。

しかし、歩き疲れてそこに座って休んでいたとき、ふと思いました。もし、今、ここが停電になったらどうなるだろうか。当然、辺りは真っ暗になり、水の流れは止まり、なんの音も聞こえなくなります。とすると、今、私がいるのは実は真っ暗で巨大な洞窟にすぎないのではないか、と。どちらが本当なのかと思いました。そして、自分が今いるのは、いつ真っ暗になっても不思議ではない洞窟にいたと思ったとき、なにかとても不安な気持ちになって、そそくさと地上に出ていったことがありました。

深く考えなければ、快適で便利でなんの不自由もない安全な社会に生きていると思い込んでいたけれども、実はそうではないのではないかと感じた瞬間でした。これは当たっていました。そのことを本気で考えるようになったのが、1995年1月17日、阪神淡路大震災でありました。また、別の意味で揺るがされたのが大震災に続くようにして起こったオウム真理教にまつわる出来事でありました。そして、東日本大震災、福島原発の事故はそのような思いを決定的なものにしました。

妙な表現ですが、「時代が折れてしまった」という感じです。なんとなく生きていくことができる時代が折れてしまったという感覚です。考えてみると、それまで私が生きてきた時代のかなりの時間は、直接的に生命が脅かされるような出来事に私が遭遇することは少なかった。けれど、それは、たまたまにすぎないということを思い知らされました。

要するに、人間は自分にとって都合の良いことを求め、都合の良いものだけを受け入れるようにできています。けれども、実際の生身の人間はそうはいきません。もちろん生命が脅かされるような出来事を望む人はいないと思います。けれども、都合の悪いことが起こってしまいます。戸惑い、不安や恐怖に直面し、時として実際に多くの人の生命が奪われ、深く傷つくことが現実となってしまいます。生き残った人びとも、あるいは直接の当事者でなくても、なんらかのダメージを実際に受けてしまうということが起こってしまいます。

あるとき、聖書に関する解説のなかでこんな言葉に出会いました。「生命というものそれ自体が、元来不安定なもの」であって、「イエスはわたしたちを、そういう不安な生き方へと派遣する」という言葉です。生命そのもの、また、人間という存在は元来不安定なものなのだとということです。そして、聖書が相手にしているのはそのような人間なのだとことです。妙に納得しました。都合が良いか悪いかということではなく、受けとめるべき事柄、受け入れるべき前提のなかにこの「不安定さ」がある、不安があるという気づきです。

もう一つの気づき

もう一つ、同じような気づきを与えられた本がありました。それは、20年ほど前に翻訳されたレギーネ・シントラーという人の『希望への教育 子どもとキリスト教』（日本基督教団出版局 1994年）という本です。シントラーはドイツやスイスで活動する絵本作家、児童文学者であり、学者です。私は、キリスト教教育やキリスト教保育に関心をもっていますので、この本も買いました。ただ、翻訳が分かりにくく長い間置いたままになっていました。しかし一昨年、あるきっかけで読み直しました。改めて読んでみて、ある種の衝撃を受けました。この領域の本では珍しいと思いますが、子どもの「苦しみ」ということ、そして「子どもと死」というテーマを真っ正面から取り上げていました。

その「子どもと死」というテーマのなかに紹介された印象的な言葉がありました。シントラーではなく、モンテッソーリという有名な教育家が行った感覚訓練を紹介したものです。分かりやすくした文章で紹介します。

「子どもに目を閉じさせて低い平均台の上を歩くよう促します。これは子どもにとっては『死』のような非安全性（不安）を意味します。そのとき大人が子どもの右と左を支えることによって、子どもは先ず外面的な身の安全性を感じます。しかし、それだけでなく『私はひとりぼっちでない』という感覚的体験をするのです。つまり誰かが自分のかたわらにいてくれるということを感じるのです」。

目を閉じて平均台を歩く場面を想像すれば、子どもに限らず私たちだって不安を感じます。それは、私たちが生きていることに必然的に伴う、元々ある「不安定」さに通じると思います。私が、時代が折れてしまったと感じたときの、なんとも頼りない感覚、得体の知れない不安に通じます。東日本大震災や福島原発の事故が起こった今は、もっとボディーブローのようにズシンと堪えるなんともいえない重さや不安に通じていくと思います。

そして、シントラーは、このモンテッソーリの感覚訓練を紹介した後に、このように明確に記します。「私たちは両親としてその際に、・・・『私が代わってあげよう』ということとはできない」と。子どもが不安にさらされていても、たとえ親であっても「私が代わってあげよう」ということはできません。そのとおりです。子どもであろうと大人であろうと、私たち一人ひとりの人生はそれがどのようなものであっても、どんなに辛く苦しくても、誰かに代わってもらうことはできません。

けれども、シントラーはできることがあると言います。大人が右から支えることです。「こうして大人は子どもを支えることによって、『私があなたに代わってやってあげよう』というのではなく『一緒にやろう』と子どもを促すのです。一緒にやる・共に歩むことで、子どもには『ひとりぼっちではない』という感覚、むしろ積極的な安心感が深まります」。

左右から手を添えて、「一緒に行こう」ということです。危険や不安定な状況がなくなるわけではありません。不安を避けることができるわけでもありません。けれども、そのなかでなお、積極的な安心感をもって、その場面に挑戦することができるようになるということです。子どもであろうと大人であろうと同じです。人間にとつての「救い」とはこのようなことなのだと思います。

一緒に行こう

今日、私たちが共に聞いた聖書の言葉は「愛は、すべてを完成させるきずなです」（コロサイの信徒への手紙 3章14節）です。聖書のいう「きずな」とは、このように、手をとって「一緒に行こう」ということだと思います。そして、イエス様というきずなが左右から差し伸べられた手のように私たちとつながって、「一緒に行こう」と語りかけてくださる姿を聖書は表しているのだと思います。

聖書のいう「愛」とは、ギリシア語の「アガペー」という言葉で、神様の愛を表す言葉です。この神様の愛には明確な形があります。それはイエス様という人です。さきほど讃美歌280番を歌いました。そこにあるように、貧しさや生きる悩みを知り、友なきものの友となったイエス様という方がこの神様の「愛の形」であり、「きずな」です。それは、危険を感じ、不安を覚える子どもを、左右から差し伸べられた手が支えるように、私たちに寄り添う神様の手の形です。

私たち人間は、「生命というものそれ自体が、元来不安定なもの」であることから逃れることはできません。誰かに代わってもらうこともできません。けれども、そこに寄り添い、「私と一緒に行こう」と手をとってくださる方がおられます。また、そのようにして支えられた者は、代わることはできなくても、友に手を差し出して「一緒に行こう」と語りかける者へと変えられていきます。

だから、どんなときでも、「生きなさい」、「生き抜きなさい」、「共に生きなさい」と語りかける言葉を聞く者でありたいと思います。